HK

柏原兵三作品集 1

潮出版社

柏原兵三作品集　第一巻

昭和四十八年九月二十日　印刷
昭和四十八年九月二十五日　発行

著　者　柏原兵三
装幀者　栃折久美子
発行者　島津矩久
発行所　潮出版社
東京都新宿区南元町一四―一
電話　三三七一―七二一　〒一六〇
振替　東京　六一〇六〇

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　鈴木製本所

第一卷　目　次

徳山道助の帰郷……7
定期訪問者……69
毛布譚……97
外套……119
引越し……135
指輪……153

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

従兄の上京……165
天と地の間……173
解説　生活人の文学……西尾幹二 291

柏原兵三作品集　第一巻

徳山道助の帰郷

第一章

徳山道助の故郷の家は、大山と呼ばれる標高千米近い山の麓にあった。大分市からローカル線で三駅目にあたるM駅で降りて、川沿いの県道を小一時間も歩くと、その麓に出る。県道からは、徳山道助の生家の庭の東の隅に植わっている三本の大きな銀杏の木と、白壁の土蔵だけが見えた。銀杏の木は道助が中学校に入学した時に母が記念に植えてくれたものであったが、いつしか見上げるような大樹となっていた。土蔵はこのあたりのどの農家にもあるので、別に彼の生家が富んでいることを意味しない。冠婚葬祭にあたって集まる親類縁者を泊めるための寝具、什器などをしまうための土蔵にすぎない。

彼の家は、先祖代々が切り拓き殖やして行った山あいの狭隘な田畑を耕作し、そのかたわら養蚕を営んで来た貧しい自作農であった。ただこの土蔵の白壁は、昔からこのあたりの景観に独特の風趣を添えていた。土蔵を白壁に塗っている家はこの辺では彼の家だけだったし、そしてまた手入れがよく行き届いていてその壁がいつも白く塗りかえられていたからである。ぬき出るように白い壁は、誰の目にもしみ入るようで清潔な印象を与える。

彼が予備役に編入されたのは支那事変の勃発直後であったが、その時まで村人たちはこのあたりにさしかかると、この銀杏の木と白壁の土蔵を仰ぎ見ては、この家から徳山道助さんが出たのだ、と思ったものだった。そしてこの小さな山村にいずれ陸軍大将が生れることを固く信じて疑わなかった。村の小学校の生徒たちは、この銀杏の木と白壁の土蔵を見ると、学校で先生たちから聞かされた彼の逸話の数々を思い出した。それは二宮金次郎を髣髴とさせる、勤勉無比の優等生だった彼の小学校の尋常科、高等科時代にまるわる逸話だった。徳山道助は神童の誉れ高く、高等科の時は一年から三年に飛び越えてしまった程よくできた。中学校に入ってからも月謝免除の特待生だった。家の手伝いを人一倍してそうだったのだ。そうしたことを色々と小学校の生徒たちは、学校だけでなく家でも聞かされていたのである。中学生は、といっても村からは毎年僅か一人か二人の中学生が誕生するに過ぎなかったが、この銀杏の木と白壁を見上げ、自分たちもこの郷土の輝かしい先輩のあとに続けぬものでもないと思ったりした。しかし徳山道助は村人たちが期待したように陸軍大将にはならなかった。

彼は陸軍中将で終ってしまったのだ。しかしそれでも、この村で陸軍の将官になったのは、彼が最初で最後だったのである。

長男の彼の代りに家を嗣いだ、すぐ下の弟の啓吉から、来たる五月十日は亡き母の三十三回忌にあたるからぜひ御帰郷ありたい、その法要には、兄が帰郷されれば、武助も帰郷するといって来ていることゆえ、兄弟妹姉全員が久しぶりに揃うことになる、姉の鶴も高齢ゆえ、恐らくこれが兄弟姉妹が相集える最後の機会になると思われる、一夕をみんなで語らい合ったら、母の霊もきっと慰められるであろう、という趣旨の手紙が、早くも正月の末に道助のもとに届いていた。

その手紙を追い駆けるように、姉の鶴からも、妹の咲からも、弟の利八からも、彼の久かたぶりの帰郷を切に勧める手紙が来た。

末弟の武助からも、巻紙に筆でしたためられた改まった手紙が来た。自分の会社の方が目下大変忙しいが、法要のある十日の朝着くように帰郷するつもりでいる、この際兄上もぜひ帰郷の御決意あらんことを、という趣旨を候文でしたためた手紙であった。

敗戦の年の三月、熊本幼年学校に入学する孫養子の治を伴って先祖のお墓参りに帰郷して以来、昭和三十年になる今まで、およそ十年間、徳山道助は帰郷していなかった。

徳山道助は日露戦争に、乃木将軍麾下の砲兵少尉として参加した。彼は乃木将軍を敬愛していたから、このことを誇りとしており、年をとってからも、酒が入ると、孫たちにせがまれて、彼の初陣であったこの日露戦争のことを話したが、彼が最後に師団長として戦った支那事変のことは、決して語ろうとしなかった。彼にとってその戦争が余程苦しくて厭な戦いであったためであろう。

彼は連隊長の使いで乃木将軍の許へ赴き、報告を手渡したことがある。その時見た乃木将軍は何十日も髭を剃っていない、憔悴し切った顔をしていたが、支那事変で徳山道助の率いる徳山兵団が苦戦に陥り、部下の死傷がほとんど涯しなく続いた時、彼はよくこの乃木将軍の不精髭だらけの、苦悩に満ちた、沈鬱な顔を想い泛べたものだった。彼自身何十日も髭を剃らずに不眠の夜を続けていたのであった。ただそんな時彼に無念に思われたことは、自分が耐えがたい苦悩を味わわされている戦争が、日露戦争ではなくて、時とともに彼自身その意義を懐疑するようになっていた支那事変であるということであった。そして日露戦争とその背景をなした明治時代に限りない郷愁を覚えることがあったのである。

軍人としての最初の戦いが日露戦争であり、最後の戦いが支那事変だったということが、この明治生れの「老兵」の軍歴の特徴であるが、今その軍歴を日露戦争から支那事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

変まで順を追って辿ってみることにする。

＊＊＊

徳山道助が陸軍士官学校を卒業したのは明治三十六年である。同年六月二十六日付で砲兵少尉に任じられ、野戦砲兵第十七連隊に配属された。しかし翌三十七年二月十日にはロシアへの宣戦布告があり、日露戦争が起った。同年五月十四日には、彼の連隊にも出動命令が下り、同年七月十八日には、広島の宇品港を出帆している。

遼東半島の青泥窪に上陸したのは七月の二十四日であったが、その間僅か一週間足らずのうちに、船に積んだ挽馬の半分は疫病のために斃れてしまっている。幸いだったのは、兵が全員無事でいてくれたことだった。

まだ若い徳山少尉は、船の中で、よく眠れなかった。そして何度も起き出しては兵隊が寝冷えをしないように、毛布をかけ直してまわったりした。

また大砲がちゃんと固定されているかどうかを、何度も起きて確かめに行ったものだった。大砲がひとりでに動き出してどこかにぶつかり射つ前に故障でもおこしたら、またそれこそ兵に怪我でもさせたら、この両方をお預かりしている者として、天子様に申訳ないと思ったのである。将校たる者は、慈父の如く兵にまみえなければならぬ、と彼は絶えず心に思った。とはいっても、兵たちはみな彼よりも年上であった。しかし眠りこけている部下たちを見ていると、彼らが我が子の如く思われて来るから不思議であった。一方彼の心は初陣の手柄を立てることに対する期待の念に満ち、五尺二寸に満たない短軀には勇気が凛々とみなぎっていた……。

彼は大砲に近寄るたびに冷たい砲身をそっと手で撫でた。可愛いいとしい大砲よ、お前が俺の小隊に赫々たる武勲の誉れをもたらすのだ。何百何千万の露助を打ち殺し、帝国に勝利をもたらしてくれなければならぬ。たのんだぞ、大砲！

青泥窪に船が着くと、徳山少尉は大砲の陸揚作業の総監督を命ぜられた。すべすべしていて捉えどころのない大砲を綱で縛って、起重機にかけるのは中々どうして容易なものではない。うまく縛ったつもりでも、途中でするりと滑り脱けないとも限らない。しかも時間は限られているのだ。

最後の大砲の陸揚げの時である。兵が愚図々々しているのを見かねて道助がいった。

「もうよろしい。荷揚げ始め！」

連日の睡眠不足で道助は気が高ぶっていたのかも知れない。それに時間が予定を超えそうなのでいらいらしていたのかも知れない。ちょっと危ないかな、と思ったにも拘わらず、そう断を下してしまったのである。部下の一人が彼のところへ駆け寄って来て、まだ危ないから、もう少し待って頂きたい、万全を期したいから、といった時も、道助は大見得を切った。まことに若気の至りであった。

「心配するな、俺に任せておけ」

起重機が動き出した。道助は船から降りた。大砲は甲板から空中に吊し上げになった。起重機の頭が向きを変えて行くにつれて、少しずつ空中を動く。そして海の上に来た時だった。綱が少しずれ、水平に宙吊りになっていた大砲が傾き始めたのである。

「ああ」と徳山道助は心の中で叫んだ。大砲が落ちる。大砲が海の中に落ちる。その瞬間寝不足でぼやけていた頭が嘘のように澄みわたった。俺の運命、徳山道助の運命もこれで終りだ。金鵄勲章も終りだ。切腹して陛下にお詫びしなくてはならぬ。母は俺の不運を知ってどんなに嘆き悲しむであろうか……

「小隊長殿、大夫夫であります」とかたわらの兵が大きな声で叫んだ。目を凝らすと大砲は今にもずり落ちんばかりの恰好でいながら、しかしそれでも無事岸壁に近づいて来るではないか。大砲が地面に着いた時、道助は大砲のもとに駆け寄り、砲身をかき抱き、海中に落ちないでくれたことを感謝した。

旅順攻撃戦において彼は小池中隊に属し、砲四門、兵十六名を指揮する小隊長として、二〇三高地攻撃の歩兵を掩護した。この時、宇品港出帆以来行動を共にして来た、中央幼年学校以来の同期生、高津弥吉少尉は頭を撃たれて戦死した。徳山道助自身も、壕に生き埋めとなり九死に一生を得た。

高津弥吉は松山の大地主の次男であったが、出征する少し前に長兄をチフスで失い、戦争が終ったら軍隊を辞め、郷里の家を嗣ぐことになっていた。人のいい男で、ついでに兄貴の細君ももらうことになっているが、器重よしで気立てのいい女だから、兄貴のお古ではあるが、我慢するのじゃ、といっていた。自分が死ぬと家を嗣ぐ者は誰もいなくなる。だから自分はどうしても帰らなければならない、と口癖のようにいっていた。戦闘中でも、砲弾の音がするたびに、「こいつをやられると子孫絶滅じゃ」といって皮の軍嚢を睾丸に半ば本気であてがったりする憎めない男だった。腕の一本位なくなってもいいが、子孫を絶やすことになったら一大事だというのである。この高津弥吉は旅順攻撃戦に参加して三日のちには戦死してしまった。

徳山道助が生き埋めになったのは、高津少尉戦死の三日後であった。

その日、ロシア軍は日本軍が担送中の負傷兵を明らかにそれと知りながら攻撃し、これを殺傷するという事件を惹き起した。そして日本軍はこれに報復することを決定し、旅順港内のロシア軍赤十字病院の砲撃を、徳山少尉の属する小池中隊に命じたのである。道助はこれを拙劣な報復、武士道に反する報復と信じ、強硬な反対意見を具申した。しかし一少尉の意見は容られるところとならなかった。仕方なしに徳山少尉は砲撃命令を小隊に下し、自身は砲撃の様子を双眼鏡で窺った。砲弾は続けて命中し、蜂の巣を

つっついたようにロシアの看護婦が逃げ出すのが見えた。徳山少尉は砲撃中止を命じた。ともかく報復の意図は達せられた、と考えたからである。ところがほかの小隊は一向に砲撃を止めない。そのうちに怒ったロシア軍が猛烈な反撃に出た。二〇三高地の重砲をもって集中砲火を浴びせたのである。徳山道助は兵たちと共に壕の中に隠れた。兵たちは念仏を唱えていた。天罰が下った、という者もいた。一発至近弾が落ち、二発目は反対側に落ちた。「今度はあたるぞ」と徳山道助が叫んだ時、三発目が命中し、壕は崩壊した。彼は生き埋めになったが、苦心して土を掻き分けてやっと這い出し、自分と共に這い出した兵に命じて助けに来ようとしない隣の壕の兵を呼びにやり、二〇三高地の方を幾度も振り返りつつ、埋まった兵を救い出した。この時二名の死者、数名の重傷者を出し、徳山道助自身両手に軽傷を負った。この痕は死ぬまで左右両手首に茶色いしみとなって残った。

旅順包囲戦も終りに近づいた時、第三軍の司令部からよく見える丘の攻撃に歩兵が向った。ところがその丘に構築されたトーチカの機銃が妨害して近寄れない。ごく間近に味方の歩兵がいるこの目標物の砲撃には、連隊一の名射手徳山少尉が適任であろう、ということになった。徳山道助は全軍固唾を嚥むうちに、数発目にこれを爆破した。「これは乃木将軍も双眼鏡で見ていたということだ」と後年徳山道助はこの手柄話を誇らしげに語ったものである。

この頃彼は中尉に昇進した。

旅順が開城すると、徳山中尉は入城式に参加することなく、直ちに奉天戦に向った。ミシチェンコの騎兵集団に遭遇したのはこの時である。猛将ミシチェンコの率いるこの騎兵集団はロシア軍中の精鋭であったが、その時は北方へ退却中であった。このミシチェンコの騎兵集団に邂逅する前夜、徳山道助の属する連隊は凍てついた高粱畑に露営したが、天幕一つなく、塹壕を掘るにも土が凍っていて掘ることができない有様であった。兵隊たちは将校の制止も聞かないで、高粱きびを焚いて煖をとった。こうして敵との接触の様子も不明のまま、日の出るのを待っていたのである。

やがて空が白んで日が昇る頃兵隊の一人が前方に林が見える、と叫んだ。

徳山道助は双眼鏡を構えてこれを見ていたが、やがて、「小池中隊長殿、林が動き出しましたぞ」と報告した。それがミシチェンコの騎兵集団であった。

小池中隊は直ちに砲列を敷いた。この時、徳山中尉は中隊の中でもっともよく働いた。両隣の小隊長は戦死し、徳山中尉は、中隊の砲の大部分を指揮して、二百米から五百米の至近距離を移動するミシチェンコ軍を射って射って射ちまくったのだ。

この時日本軍にも多数の死傷者が出たが、ミシチェンコ軍の被害は莫大で死屍累々たるさまであった。徳山道助の

指揮する砲で、少なくとも千や二千のロシア兵を殺したことは確実であった。「しかしなぜミシチェンコの軍がわれわれに対して正面攻撃に出ないで、退路を側面から攻撃されるままに甘んじていたのか、未だに分らない」と後年徳山道助は注釈をつけたものである。

その頃ウラジオストックの露国軍隊が日本海軍を全滅させてしまったので、満州の日本軍はそのまま孤立してしまうというデマが飛んで、徳山道助中尉は大いに憂えた。

内地には旅順の攻防の夥しい被害が伝えられていた。道助の父母は、音信が跡絶えていることから、道助がもう死んだものと思い込み、嘆き悲しんだ。道助に軍人志望を勧めた道助の母方の操三郎伯父はずい分恨み言をいわれた。その時旅順から「道助生きちょる」と走り書きして出した葉書が届いて、郷里の人々を大喜びさせたのである。

ルーズベルトの斡旋によってポーツマス条約が成立した時、徳山道助は奉天の近くにいたが、その報が入ると全軍は湧き立った。みんな無茶苦茶に騒いだ。徳山道助も軍刀を吊ったままダンスをした。

内地に凱旋した軍を迎える国民の熱狂は大きかった。この時徳山道助は任官して初めての帰郷をしたが、村中の人人が村の入口まで彼を迎えてくれたのであった。小学校では徳山道助中尉凱旋記念祝賀大会が開かれた。道助の末弟の武助はこの時小学校の二年であったが、兄の徳山道助中尉に見せる剣舞の練習を二週間にわたってつけられたことを憶えている。道助が滞在した一週間、さまざまな祝賀会が連日彼のために催された。徳山道助の感激は大きかった。

徳山道助はこの日露戦争の功により功五級の金鵄勲章と年金三百円、並びに勲六等単光旭日章を授けられた。父が中風を病んでから東京に引取って中学に上げた末弟の武助を、道助が更にK大学の予科に入学させたのも、この金鵄勲章の年金があったからこそであった。

凱旋後も徳山道助は引き続き同じ連隊に勤務したが、やがて野戦砲兵射撃学校教官に任ぜられた。

その頃彼は鷲津家の長女と結婚した。わが人生の最大の失敗と生涯悔いて止まなかった結婚である。媒酌人は郷里の殿様である蒲生子爵であった。鷲津家はもう東京に出ていたが、大分県鶴崎の出身で同郷であった。当主の鷲津太郎は男爵陸軍少将で、日清戦争に従軍していた。鷲津家は細川藩の家老を勤めた家柄で、鶴崎では小大名と呼ばれた旧家であった。

明治四十二年徳山道助は選ばれて陸大に入学した。ここでは学課が厳しくて、暁の頃に床に就いたことも屢々であった。徳山道助は戦術に秀でていたが、戦術の教官と意見が合わず屢々烈しく衝突した。そのためか卒業席次は彼の意に反して悪く、六番であった。中央幼年学校、士官学校を一番で卒業した道助にとってこれは著しく不満なことであったが、致し方なかった。この間徳山道助は大尉に任官

していた。

柳腰の美人である妻の綾子は、長女富子を出産してから流産を重ね、ヒステリーの発作を屢々起すようになっていた。結婚後日を重ねるに従い、彼は妻のうちに、ことごとく自分の期待を裏切るものばかりを見出していた。優しく母性的な女を期待していたのに、妻は驕慢で我儘な女であった。彼を満足させたのは妻の美貌だけであった。

大尉に任官してまもなく彼は末弟の武助を引きとって、東京の中学に通わせることにした。この頃妻の父が病死した。

大正二年徳山道助は陸軍省兵器局課員に任ぜられ、翌三年第一次大戦が勃発すると、ロシアに対する軍需物資供給の実施に携わった。彼は屢々ウラジオストックに出張して、供給計画の実施に万全の注意を払い、十年前に戦った旧敵国露国の勲章まで授けられている。しかしそれが徳山道助が当然予期していた勲章より一段低いものだったので、彼は怒って、それを決してつけようとしなかった。

第一次大戦が終結をみると、大戦中少佐に昇進していた徳山道助は、一年間の欧米視察を命ぜられた。これには大戦中兵器局課員としてロシアに対する軍需物資供給にあたって示した彼の功績に酬いる論功行賞の意味があった。

印度洋に於て徳山道助は熱病に苦しみ、水葬されることを大いに苦に病んだ。

マルセイユに上陸した道助は、一路パリに向った。徳山道助は士官学校に於てフランス語を専攻し、フランス砲術に於ては陸軍切っての権威と目されていた。彼が主な滞在地にパリを選んだのはそれためであった。

パリではフランス陸軍退役少佐の家に寄宿、日常生活を共にして、フランス人の質素な生活に大きな感銘を受けた。大戦直後のフランスの民情を視察し（この中には娼家を訪れたことも入っていたが）、且つ軍関係の機関をつぶさに見学したほか、大戦の戦跡調査にあたった。

八カ月にわたるパリ滞在ののち、ベルリンに移り、敗戦国ドイツの荒廃を目のあたりにし、マルクの暴落を体験した。ベルリンではフリードリヒ・シュトラーセのパンジオンに止宿し、約六週間滞在した。その間三週間ばかりバルカン諸国を歴訪した。そののちロンドンを経て、アメリカ合衆国を短期間にわたって見学し、帰朝した。帰朝後出張旅費の三分の一が余ったことが分ったので、彼はこれを陸軍省に返却している。

帰朝してまもなく徳山道助は京都師団の参謀に任ぜられた。長らく本省にいて官僚的な生活に飽き飽きしていた徳山道助は喜んで京都へ行き、演習に打ち込んだ。

この頃徳山道助は離婚を真剣に考えたが、娘のことを考えて離婚に踏み切れずにいた。それに経歴に傷がつくことを恐れたという点がなかったとはいえない。

母が姉の鶴を連れて、孫娘を見に初めて彼の家を訪れたのもこの頃だった。

シベリア出兵に際して、徳山道助は特命を帯びてウラジオストックへ赴き、パルチザン掃蕩戦の研究にあたった。彼が遂に決意した離婚を取止めたのは、不意に下ったこの出張命令のためであった。

任務終了後帰国した徳山道助は陸軍高射砲隊長に任ぜられた。徳山式高射砲術が編み出されたのはこの時である。民間に於て反軍思想の高まった時代で、電車の中で、サーベルの先が触ったといって罵られた軍人が数多くいた。徳山道助にとって内外共に不愉快な時代であった。

大正十二年は関東大震災の起った年であるが、この年の五月十日に徳山道助は母を失った。母に大佐になった姿を見せられなかったのが彼の痛恨事であった。なぜなら翌十三年に道助は大佐に昇級し、近衛砲兵連隊長に任ぜられていたからである。この年の末長らく中風を病んでいた父も母のあとを追って他界した。そのため徳山道助は珍しく二年続けて帰郷した。

昭和二年徳山道助は再び本省に戻り、軍務局砲兵課長、兵務課長を歴任した。この頃妻の実家のただ一人の跡取りの兄が、三井物産の社員としてパリに滞在中自動車事故に遭って死亡し、そのあとを追うようにして、妻の母が死んだ。徳山道助が離婚という考えを振り捨てたのはこの時である。妻の誇った実家が崩れ去った時に妻をほうり出すような形で離婚することはできないと思ったのである。しかしその後も妻のヒステリーは昂ずるばかりであった。それを人目にさらさないようにすることで彼は心を砕いた。彼は家庭の幸福を諦め、職務に精進することによって結婚生活の不幸を忘れようとした。

昭和五年徳山道助は少将に昇進し、野戦重砲兵第一旅団長に補せられた。この頃徳山道助は独り娘の富子を銀行員に嫁がせた。当時、独り娘は養子を迎えなくては嫁がせることができなかったから、道助は娘を嫁がせる前に、形式上、末弟の武助を養子にした。そして娘に二番目の男の子が生れると、かねての約束通りその次男を養子に迎えて、形式上の養子に過ぎなかった武助を離縁した。その頃すでに武助は結婚して子供も一人いたから、親子三人で長兄の家に養子に入り、三年後には離縁されたのである。武助にしてみれば迷惑な話だったが、世話になった兄のたのみとあらば、引受けるより致し方なかった。

昭和七年、徳山少将は野戦重砲兵学校教育部長に任ぜられ、その後同校長、陸軍士官学校長を歴任した。

徳山道助は日本に於ける砲学の権威として認められていた。平面砲術から立体砲術への切替を行なったのは彼であった。

昭和十年徳山道助は中将に昇進し、砲兵科の教育の総元締たる砲兵監に任ぜられた。翌十一年に、二・二六事件が起きた。

日本は支那事変の泥沼に足を踏み入れようとしていた。徳山道助は皇道派や統制派の青年将校より大分閥の南次郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.